

氏名・（国籍）	張 美僑（中国）
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	博甲第25号
学位授与年月日	令和4年3月9日
学位授与の要件	学位規程第2条第2項該当
学位論文題目	東アジアにおける『大般若経』の成立と展開 —敦煌写本と日本古写経を中心として—
論文審査委員	主 査 教授 落合 俊典 副 査 教授 池 麗梅 副 査 教授 藤井 教公

論文内容の要旨

本論は玄奘（602～663）が訳した『大般若波羅蜜多経』（以下、『大般若経』）を研究対象とし、東アジアにおけるその成立と展開を考察し、特にそのテキストの書写に関わる校合の実態を明らかにするものである。

全 600 巻に及ぶ膨大な經典である本経に対する従来の研究のうち、第一に列挙されるべきものとして、江戸時代の禅僧・祖芳（1722～1806）が編輯した『大般若経校異』がある。それは中野是心（？～1677）によって印刻された中野是心版を底本にし、他の五本を用いて行われた校異、及び翻訳者玄奘の伝記、經典の信仰、日本への伝来、日本における読誦・書写・刊刻などの 13 の事項から成る資料集である附録によって構成される。後世における『大般若経』テキストの校異とその流伝に関する研究の先鞭をつける存在である。しかし、『大般若経校異』には、敦煌の莫高窟で 20 世紀初頭に発見された敦煌文献と日本の奈良・平安時代の古写経本が殆ど反映されていない。

本論は、東アジアにおける①『大般若経』の成立と展開、②『大般若経』の書写と校合、という二つの視点から検討する。特に祖芳からさらに時間を遡って、7 世紀～11 世紀の中国、日本において『大般若経』の校合が如何に行われたかに着目する。

本論の各部各章の内容は以下の通りである。

第一部【『大般若経』の成立と展開】

第一章 『大般若経』の構成

先行研究を参照しながら本経の十六会と各会の異訳本を概観し、本経と他の般若經典との関係性を説明した。また、玄奘訳の『能断金剛般若経』の単行本（第九会に相当する）の敦煌写本や、中国南宋時代に完成された『大般若経』の学習法である『大般若波羅蜜多経関法』

の存在などを紹介した。

第二章 中国における『大般若経』の成立と流伝

本経の翻訳に関する唐の諸伝記の成立関係を明らかにし、それらが「寺沙門玄奘上表記」・『大唐故三藏玄奘法師行状』・『続高僧伝・玄奘伝』という順で完成したと想定し、「凡四處十六會説」という本経の構成を示す記述は『行状』のみに確認できることを解明した。そして「凡四處十六會説」の来源を『大般若経』の訳場に参加した玄則(7c)による「十六会序」に特定し、本経の序文には、「太宗・高宗の序文」と「十六会序」の二種類があり、それぞれが本経の本文テキストに付されており『大般若経』の流伝の形式に影響を与えたことについて考察した。つまり、『大般若経』のテキストの形式は、「太宗・高宗の序文」のみが付されている初期形態、「太宗・高宗の序文」「十六会序」が付されている中期形態、「十六会序」のみを付する後期形態(刊本一切経を主とする現段階)という順で変化していったことが判明した。

さらに、唐代の諸経録における本経に対する扱いを考察し、一切経の中における本経の位置づけの変遷を解明し、一切経の冠頭に配置されるという地位の形成が智昇の『開元録』から始まったことを突き止めた。

第三章 『大般若経』信仰の思想的な要因

『大般若経』信仰の思想的な面に関して、従来強調されていた般若思想以外の要因について考察した。本経に存在する他の般若経典には見られない呪文及び功德文に注目し、それらに『大般若経』特有の存在価値を確認した。つまり、『大般若経』における大神呪によって得られる利益の主体には国(国土)が存在し、このような国に対する利益は『大般若経』の異訳や別の般若経典には全く期待されていないことを明らかにした。そして、玄奘訳以前の他の経典における「護国」思想と『大般若経』の「護国」の要素に共通点があることを解明した。『大般若経』は『金光明経』『仁王般若経』『法華経』という従来の護国経典とともに「護国」の目的を有する経典であり、それが『大般若経』信仰の思想的な要因であるという結論に達した。

第四章 奈良時代における『大般若経』の受容—国家の視点から個人の視点へ—

『大般若経』の伝来経路については唐からの直接の伝来ではなく、新羅から伝来した可能性が高いと想定した。また、『続日本紀』に見られる経典読誦に関する複数の記述によって、本経への重視は時期を追うごとにその程度が高まっていった傾向があることを指摘した。個人的な信仰については、膨大な量を有する『大般若経』が選ばれて読誦された理由には、権力ある人がその権威をさらに高めようとする要求、自分の一族に利益が及ぶことへの発願、及び僧侶による逝去した師匠の冥間の菩提と、師匠の生前の願望を共有し師匠の誓願を継承する発願などがあることを解明した。

第二部【『大般若経』の書写と校合】

第一章 敦煌写本に見る『大般若経』の書写と校合

敦煌写本『大般若経』をその書写状況から、主に巻尾に識語が付されているもの、写経生・

校経生の情報が見られるもの、兌廢稿と見なされた写本を含むものという三つの種類に区分した。また、敦煌写本には年紀が記されているものは少数であり、書写時期が殆ど 8 世紀後半からのものであると確認した。さらに、写経生・校経生の情報には「校」と「勘」の混同が見られ、両者の関係性が検討すべき問題として浮上した。「勘」は他本による勘経の意味であると仮に推定したが、「勘了」を経たとしても、明らかな誤写が存在することが確認された。また信頼性が高い三界寺・報恩寺・浄土寺などの寺院の「蔵経本」に、書写段階の不注意による過失、明らかな誤写などが存在することを確認したことによって、他本による勘経作業が行なわれなかったと結論した。従って、「校」と「勘」は同じ意味で使用されていると推定した。

第二章 奈良写経に見る『大般若経』の書写と校合

蓄積された奈良一切経研究の成果によりながら、奈良時代における『大般若経』の書写状況を概観した。本経の校合については、奈良前期・中期の「再校」までの校正作業から、後期の「三校」までのそれに発展してきた実態が見られた。また奈良後期の『大般若経』校合では、一校、二校に多くの僧侶が参加した一方で、三校を行う者のほとんどが僧侶ではなかったことは、唐代の長安宮廷写経の二校、三校を行った者が僧侶であった点と大きく異なることを指摘した。

奈良写経に見られる「勘」とは、二人で一緒に行う「校讎」と、写経の前後にかかわらず、底本とは別のテキスト（証本）によって校訂することという二つの場合があることが確認できた。これを踏まえて、「校合」の言葉の意味合いを以下のように説明した。つまり、「校合」は、底本と書写されたものとの校経（第一段階）と、書写されたものをもとにして、他本を証本として校異する勘経（第二段階）の二つの作業を含めた言葉である。

第三章 平安写経に見る『大般若経』の書写と校合

平安写経の校合裏書から読み取れる、敦煌・奈良写本にはほとんど見られない学問的な『大般若経』の校合の実態を検討した。興福寺の学問僧真興（935～1004）による 31 箇所「疑闕文」リストの存在を確認し、その契機として、天台宗権少僧都法眼和尚嚴久（？～1008）が巻 79 に闕文が存在することを発見したということを知り、その影響について、平安中・後期書写の金剛寺本・護国寺本・長谷寺本の『大般若経』の校合裏書に、「疑闕文」が利用された記録を提示した。特に護国寺本と長谷寺本の校合裏書にはほぼ一致する文章が存在することにより、「基本校合裏書」の存在を想定した。それは真興の「疑闕文」を基本資料としており、学問僧所有の「赤尾」・「妻室本」・「喜多院本」などの『大般若経』を校本（勘経の証本）として校合されたと考えられる。

最後に、以下の 3 つの附録、【現存日本古写経本『大般若経』所在一覧（院政期以前）】・【般若堂印行大般若経校異 翻刻】・【『大般若経』校訂の試み（巻 1・79・600）】を付した。

論文審査の結果の要旨

本論文は、『大般若経』漢訳時における諸問題とその後の本文テキストの校合・校勘をめぐる展開を論述したものである。従来本経の校合・校勘に関する包括的研究は江戸時代の釈祖芳撰『大般若経校異』以降何人も研究に着手してこなかった。

本経は漢訳経典の中、最大の分量（600巻。60億40万字）であるとともに東アジア仏教世界に大きな影響を与えてきたことは周知の事柄であったが、テキストの校訂に関する研究は殆ど研究の対象とされてこなかった。本論は、敦煌本と日本古写経本とに残る校合・校勘の足跡を検証し、『大般若経』本文校訂の歴史を明らかにした好論である。

本論文の構成は序論・本論・結論とからなっている。序論では、『大般若経』研究における包括研究の僅少性の理由について先行研究を取り上げ略述している。

本論では二部構成としている。

第一部では「『大般若経』の成立と展開」と題し四章より成り立っている。

第一章においては、『大般若経』の構成について考証している。本経は四処十六会より成り立っているが、初会から第五会までを「小品系・小品系般若経」、第六会から第十六会を「特定のテーマを有する般若経」とし、まさに般若経典の集大成であると位置づけている。

また南宋時代に成立した『大般若経』の暗唱法とも称される『大般若波羅蜜多経関法』の内容について宮内庁書陵部所蔵本を用いて分析している。『大般若経』の研究史において本書の紹介は殆どなされていないことを踏まえると本論の特色の一つとなるものである。

第二章では中国において『大般若経』が漢訳されてからその書写形態の変遷を論証している。すなわち、太宗・高宗の序が付された初期形態から、太宗・高宗の序と玄奘の十六会序が付された中期形態、そして玄奘の十六会序だけになった後期形態の三段階であったことを初めて証明している。

また『大般若経』が経録の冠頭に位置づけられたのは智昇の『開元録』からであると手堅く考証している点も評価に値する。

第三章にあっては、『大般若経』信仰の主要な要因の一つに護国思想があるとして、第六会の天王般若分に説かれる大神呪によって得られる利益が「国土」であること、また玄奘自身が標榜する「鎮国重宝」に求めている。この考証に大きな難点は無いが、『大般若経』信仰の要因は護国に止まらないのでさらに広い観点から考察する必要が残されている。

第四章では、「奈良時代における『大般若経』の受容」を、幾つもの新視点から論述している。まず、日本伝来について唐からの直接の伝来ではなく、新羅から伝来した可能性が高いと考察している。つぎに『続日本紀』の記述から『大般若経』に期待される役割が、奈良前期の「為除災異」から、奈良中期の「消除災害、安寧国家」「日蝕」「地震」へと展開したことを読み解いている。さらに奈良後期においては、疾疫の祓い、中宮などの病氣平癒のため専ら『大般若経』のみが読誦されるようになったと述べる。

これらの考察は従来の『大般若経』研究に寄与するものであるが、日本史の豊富な文献資料をさらに渉猟して論述の確実性を深める必要がある。

第二部では「『大般若経』の書写と校合」と題し三章から成っている。

第一章では、敦煌本に見る『大般若経』の書写と校合について詳説している。敦煌本の校合に関してはすでに先行論文があるが、著者は奈良写経本の校合から得られた知見を援用して難読の校合の解釈に成功している。

第二章では、奈良時代における『大般若経』の書写と校合がどのようになされたか具体的に考察している。日本における校合は、底本と書写本との校経（第一段階）が行われ、次に書写本と他本との校異を行った勘経（第二段階）という二つの作業を含めた用語であると述べる。『大般若経』は三校まで行うのが通例となったがその理由については述べられていない。

第三章では平安時代の『大般若経』の書写と校合について詳述する。

天台僧の巖久が指摘した『大般若経』の欠文を契機として、興福寺の学問僧真興はさらに熟覧考証し、計三十一箇所、の闕文があると指摘して「疑闕文」を作成した。これが後世の『大般若経』校合事業において基本資料となったことを明らかにしている。

最後の結論において以上の本論文を要約している。(1)『大般若経』漢訳後の写経の変遷が三段階にわたったこと、(2)宋代に撰述された『大般若経』の暗唱法の書を分析したこと、(3)平安時代に『大般若経』の欠文31箇所が指摘され、以後の写経事業に裨益したことを述べる。また残された問題として『大般若経』600巻の校訂本作成を遂行することだとしている。

以上、本論文の梗概を適述するとともに、論文の功績と問題点を指摘してきた。本論文には従来殆ど試みられなかった『大般若経』における諸問題を、写経本の変遷と欠文の補訂研究史の二点から綿密に詳述し考察した優れた論文と言える。

但し、研究対象が歴史、地理、テキスト、写経本調査等広範囲にわたるため、考察が十分とは言えない箇所が各章各節に散見する。併しながら本論文の功績を大きく減少させるものではない。よって以上の点から本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に十分値する成果であると評価するものである。